

北海道の地名と生活文化

宮 良 高 弘

1987年8月22日（土）午後12時30分から北海道新聞社ホールにおいて、北海道新聞社主催の道新シンポジウム「もっと、北海道の地名を考えるために」が開かれた。その折り、山田秀三「北海道のさまざまな地名」という講演に引き続き、シンポジウムがもたれた。本稿は、筆者がパネリストとして参加した際の発表原稿に、大幅な加筆訂正を加え公表したものである。他のパネリストは、萱野茂（二風谷アイヌ文化資料館館長）、榎森進（函館大学助教授）であり、コーディネーターは田端宏（北海道教育大学教授）であった。

-
- | | |
|------------------|-----------------|
| I. はじめに — 問題の所在 | IV. 北海道の地名の変遷過程 |
| II. 北海道における地名の特徴 | V. むすび |
| III. 北海道の村落形成と地名 | |

I. はじめに — 問題の所在

人々の生活の場を象徴する地名は、その地域社会に長い間息づき生活文化を集積してきた人々の奥深い歴史を無言のうちに語っている。ある地域で生まれ育ち、その土地で生涯をとじた人はもとより、旅に出た同郷人が異郷で生活する際にも、故郷にまつわる地名は、現実に生活を営んでいる地域の名称とともに絶えず意識される存在である。個々人が成長する過程で、過去に関わってきた地名は、現在の生活の場である地域の地名とともに、その人にとっては絶えず生きる原点であるといえよう。

このような意味で地名は、ただ単にその地域社会を表す名称にとどまるものではない。地名には、人々の限りない思いが込められているのである。

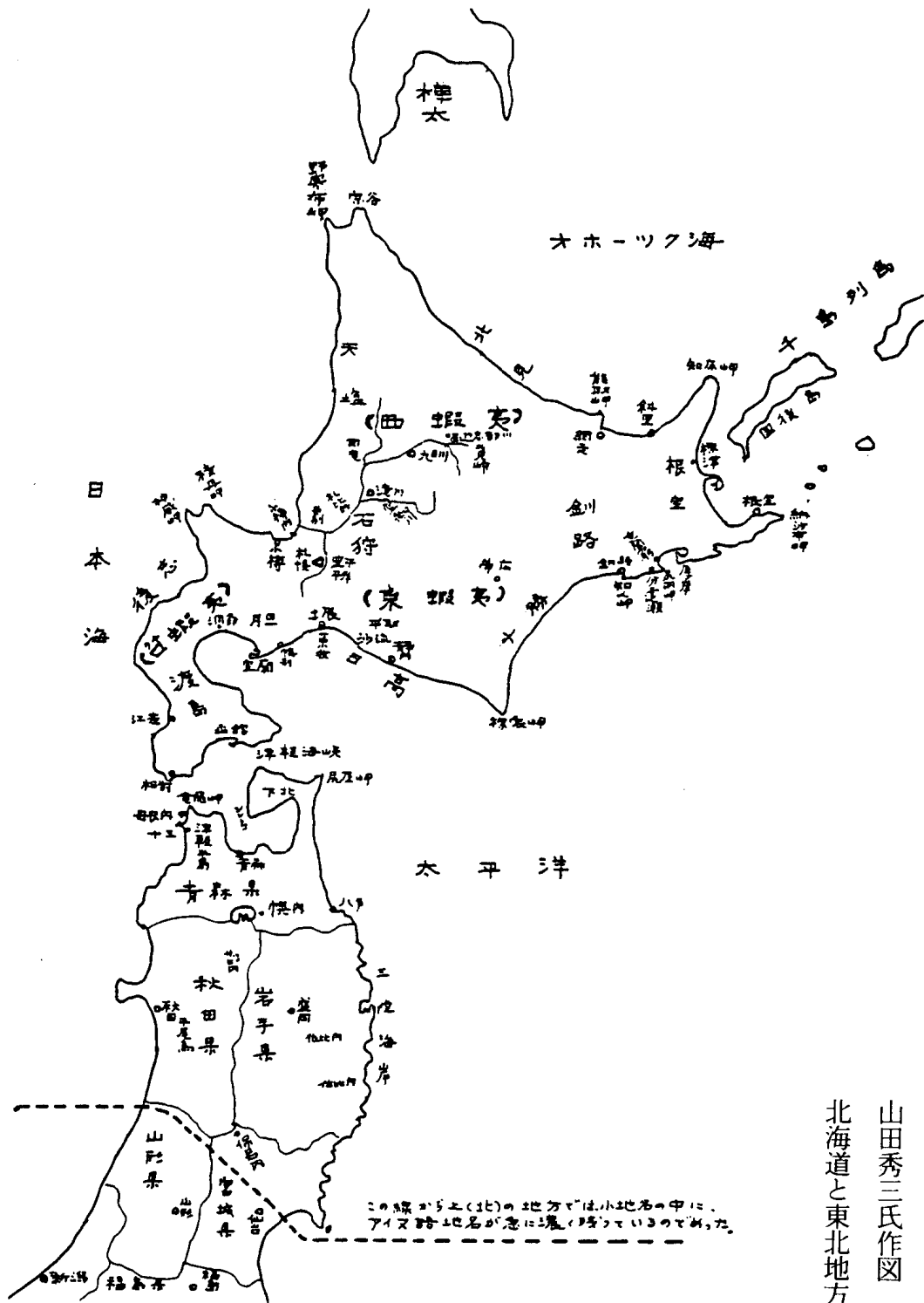
読者の皆さんもおそらく同様であろう。北海道の人にとって思い起こす地域は、釧路、根室、北見、帯広、旭川、函館、室蘭などという都市の大きな地名ではなく、北海道以外に出身地を持つ人も含めて、むしろ自己を育んできた村や町などの小さな地名である。人は自分が生まれ育った地名を小さな単位で語っても、相手に伝わらないという思いが、札幌とか、函館とか、根室とか、近くの大きな都市の地名で自分の出身地を語ってしまうのである。

歌手の細川たかしはマスメディアを通して大きな都市の地名ではなく、真狩（マッカリ）という小さな村名で自分の出身地を語り、盛んに自己を育んできた村を宣伝している。このことが多くの人々の共感を呼んでいるのは、地名に対する人々の思いが共通しているからであろう。彼にとってみれば、自己を育んできた土地は、札幌でもなければましてや函館でもないのである。あくまでも真狩という小さな村なのである。

大都市で生まれ育った人や、大都市を点々と転勤して歩いた転勤族の子弟が、盛んに自分には故郷がないと訴えるのは、ある意味で自分は都会育ちだという優越感の表れである。それとともに、他面においては故郷を小さな村にもつ者への限りない羨望でもある。名もない辺境な地で生まれ育った人程、実際には自分の生まれ育った村よりも更に大きな町を、いな、それよりも大きな都市というように、都市志向の生活文化の流れのなかで、二重・三重の心の重荷を背負っているのである。

自己が生まれ育まれてきた小さな村を意識しながら、それを伝えることができないもどかしさは、二重にも三重にも心の負担となり、人の故郷へ寄せる思慕を内面的に一層つのらせている。このような意味で地名は、人々の生活への思いを反映した心の原郷であるといえるのである。わたくしは人々が織りなし、息づいてきた生活文化を通して、北海道における地名の意味を考えてみたいと思う。

北海道の地名のベースは、先住のアイヌ民族にまつわるものである。大木、岩、小高い丘やくぼみにも名称がつけられ、アイヌ民族の生活の場を象徴していたであろう。山田先生のご研究によれば、アイヌ語地名に象徴



山田秀三氏作図
北海道と東北地方（北奥）略図

されているように、その圏域は東北地方北半（北奥）以北までは極めて濃厚に及んでいる〔図参照〕。この北奥羽のアイヌ語地名について、山田先生はいろいろな折りに触れ論じているが、北奥羽の地名研究のなかで、特徴的なことは、実証的研究を推進していく過程でアイヌ語で地名を解釈していく作業のほかに、史的資料をも豊富に駆使し、中世の東北に残されたエミシ、エゾ関係の資料とアイヌ語による地名解釈を重ね合わせていることである。その結果、「およそ 1,000 年程さかのぼると東北地方北半に、アイヌ語を話す人々が居住していた事実がわかってくる。」⁽¹⁾ と指摘している。

わたくしの管見するところでは、遠くは沖縄地方にも類似の地名がみられる。たとえば、小平（オビラ）、赤平（アカビラ）、安平（アビラ）などのようにピラまたはピィサ、ピラと発音する地名が沖縄県にみられる。石垣島北西部に川平（かびら）、西表島北西部の浦内川上流に、神様が遊ぶところを意味するカンピラとよばれる地名がある。宮古島平良（ひらら）市は方言ではピィサラと、石垣島の平得（ひらえ）はピィサイ呼んでいる。ピィサ、ピラはピラと同様に用いられ、今では平らなところを指しているように思われているが、もともとの意味は古語やアイヌ語同様に、崖や坂を意味していたように思われる。

北海道の幌加内（ホロカナイ）、歌志内（ウタシナイ）、黒松内（クロマツナイ）、神恵内（カモエナイ）、岩内（イワナイ）、静内（シズナイ）、木古内（キコナイ）や東北地方の伊保内（イボナイ）、毛馬内（ケマナイ）、沼宮内（ヌマクナイ）などのようにナイと発音する地名が西表島や与那国島の祖納（そない）にみられる。

アイヌ語で川を表す地名には、ペツ（別）とナイ（内）がある。故知里真志保博士は、「アイヌ語に川を表す語が二つある。pet と nay と。北海道の南西部では pet を普通に川の意に用い、nay は谷間を流れて来る小さな川の意に限定している。カラフトでは nay が普通に川の意を表わし、pet

(1) 山田秀三「アイヌ語族の居住範囲」『山田秀三著作集』I 草風館、1982
p. 127～134

は特に小さな川を表わすと云うが、地名にはめったに現れて来ない。ただし、古謡では pet を普通に使う。北海道の北東部網走や宗谷などでも地名では nay の方を普通に用い、pet は山中の小さな支流に稀につけている位のものである。北千島では全然 nay が無い。尚この二つの内 pet は本来のアイヌ語で、nay の方は外来語らしい。川を古朝鮮語でナリ、或は現代語方言でナイといっているのとの関係があるかもしれない。」⁽²⁾ と、ナイが外来語であることを指摘している。

山田先生の長い間のご研究によっても、どうやらナイは輸入語ではないかというのである。そうすると西表島や与国島のナイとも関連し、興味深いことになる。またアイヌ民族にみられる東方上位の思想は、沖縄にも広く分布し、たとえば波照間島のニガイウタ（願い歌）に「アルピンガス、オールウヤーン……………」(東方にいらっしゃる神様……………)，とか「アルピンガス、ブナレーマ、アミユタボーリ……………」(東方にいらっしゃる女神様、雨を給われ……………)などと歌われている⁽³⁾。話が遠く沖縄まで及ぶと、日本民族形成の問題へと次第に話題が途方もなく拡大していくので、この辺でこの話題はとどめておきたいと思う。

しかし、ここで注意しなければならないことは、ある文化要素のみをとりあげて、その類似性に基づいて日本民族の起源を安易に語ってしまってはならないということである。さまざまな生活文化要素を総合的・体系的に把握した上で論じなければならない問題であるだけに、避けなければならないのである。

このような問題把握の傾向が、古くは安田徳太郎氏、最近においては大野晋・梅原猛の両教授にみられ、多くの議論を巻き起こしたことはわれわれの記憶に新しい。しかし、それにしてもわが国の生活文化を解明する上で、知里真志保博士も指摘しているように、周辺諸民族の文化接触による文化の相互受容にかかわる問題把握は重要である。とりわけ、アイヌ民族

(2) 知里真志保『地名アイヌ語小辞典』楡書房、1956

(3) 宮良高弘『波照間島民俗誌』木耳社、1972

の生活文化にかかわる問題として、国内的には津軽海峡以南地域社会との文化習合の問題は極めて重要である。

アイヌ民族は、彼らが息づく蝦夷地の地名を、山や河川や谷などの自然的景勝や、植生などの諸特徴によって付けてきた。このような地名命名の方法は、青森県以南の、現在においては和人が住む地域社会においても同様であったに違いない。1987年夏に調査を試みた道南の松前郡福島町白符では魚を切る刃物をマキリと呼び、野菜を切る「包丁」と使い分けている。アイヌ語のマキリという名称は、北海道や東北地方に広い分布を示し、地名ばかりでなく民具などの名称にも若干のアイヌ文化の痕跡をとどめている。

この圏域は、山田先生が指摘するアイヌ語地名が色濃く分布する東北地方北半（北奥）と重なるように思われるところから、時代を確定できないまでも、かなり古い時代にこの地域にアイヌ民族と和人が隣住し、生活文化の混合・融合が進み、地名や民具などの名称において、アイヌ民族と和人のいずれの起源ともつかない生活文化がすでに形成されていたかも知れない。

アイヌ民族博物館の伊藤裕満学芸員の見解によれば、魚鉤（引き鉤）は、東北地方の青森、岩手、秋田、山形の河川筋で使用されているが、北海道アイヌも使用し、それをカンキピキまたはカンキテエタエとよんでいる。またアトゥシ（厚司）は、北海道内や樺太で使用されているが、東北地方での分布は、青森県、岩手北部などで近代まで庶民が着用していた記録があるというのである。

しかし、現時点でみる限り和人の生活文化の態様から、地名、民具、衣類以外にアイヌ民族にまつわる文化要素の名称の影響は、ほとんど認めることが出来ない。このように遺跡から出土する遺物や、アイヌ語地名および民具の名称が東北地方北半以北まで濃厚に及んでいることしか、両民族の相互影響を証拠立てることはできない。このような意味で地名および民具の名称は、両民族の接触・融合過程を物語る重要な証拠立てとなっているのである。

Ⅱ. 北海道における地名の特徴

北海道における地名については、よくいわれているように、もともと文字を持たない狩猟民の先住のアイヌ民族が、日常の生活過程で呼び習わしていた地名に、後から移住してきた和人が次々に、主として漢字の当て字を付けていったところに第一の特徴がある。しかも、音読み訓読みが無秩序に組み合わせられたのも少なくない。だからその土地に馴染みのない人にとっては、この漢字でこう読むのかと、自分の見当はずれな読み方に驚くのである。明らかにアイヌ語起源と云い難い地名も含めて、北海道新聞掲載記事を若干修正して紹介しておこう。

簾舞（ミスマイ・札幌市），神居町雨粉（カムイチョウウブン・旭川市），能取（ノトロ），呼人（ヨビト・以上網走市），神威（カモイ・歌志内市），漁太（イザリブト・恵庭市），対雁（ツイシカリ・江別市），忍路（オショロ・小樽市），張碓（ハリウス・小樽市），以平（イタイラ・帯広市），大楽毛（オタノシケ），幣舞（ヌサマイ・以上釧路市），稀府（マレップ・伊達市），長都（オサツ・千歳市），美々（ビビ・千歳市），温根沼（オンネトー），瑤瑤瑠（ゴヨウマイ），春国岱（シュンクニタイ），長節（チョウボシ・以上根室市），富岸（トンケシ・登別市），蛾眉野（ガビノ），志海苔（シノリ・以上函館市），一己（イチチャン・深川市），絵鞆（エトモ・室蘭市），渚滑（ショコツ・紋別市），丁未（テイミ・夕張市），沙留（サルル・興部町），札弦（サツル・清里町），止別（ヤンベツ・小清水町），富武士（トップシ・佐呂間町），美禽（ミドリ・美幌町），計呂地（ケロチ・湧別町），芭露（バロウ・湧別町），濃昼（ゴキビル），聚富（シュップ），望来（モウライ・以上厚田村），生振（オヤフル・石狩町），花畔（バンナグロ・石狩町），袋達布（フクロタツプ・新篠津村），財田（タカラダ・洞爺村），礼文華（レブンゲ・豊浦町），長和（オサワ・穂別町），女那川（メナガワ・恵山町），国縫（クンヌイ・長万部町），飯生（イナリ・上磯町），度杭崎（ドグイサキ・砂原町），軍川（イクサガワ・七飯町），川汲（カックミ・南茅部町），咲来（サックル），物満内（モノマナイ・以上音威子府村），班溪（パンケ・下川町），鈴和（レンカ・中富良野町），美馬牛（ビバウシ・美瑛町），上岐

登牛（カミキトウシ・東川町）、湧駒別（ユコマンベツ・東川町）、辺溪（ペンケ・美深町）、奔渡（ポント・厚岸町）、老者舞（オシャマプ）、賤夫向（セキネップ）、初無敵（ソムテキ）、知方学（チッポマナイ）、入境学（ニコマナイ）、冬窓床（フユマ）、浦雲泊（ポントマリ）、分遣瀬（ワカチャラセ・以上釧路町）、後靜（シリシズ）、散布（チリップ・以上浜中町）、梨野舞納（リヤムナイ・共和町）、熱郭（ネップ・黒松内町）、持田（モッタ・島牧村）、入舸（イリカ・積丹町）、歌棄（ウタスツ・古平町）、大奮（オフン・歌登町）、音忠部（オッチュベ）、音標（オトシベ・以上枝幸町）、敏音知（ピンネシリ・中頓別町）、晩生内（オソキナイ・浦臼町）、新成生（シンナリウ）、母子里（モシリ・以上幌加内町）、芽登（メトウ・足寄町）、美加登（ミカド・池田町）、貴老路（キロロ・浦幌町）、然別（シカリベツ・音更町）、居辺（オリベ・上士幌町）、萌和（モイワ・大樹町）、旅来（タビコライ・豊頃町）、押帯（オショップ）、勇足（ユウタリ・以上本別町）、小利別（ショウトシベツ）、斗満（トマム）、苦務（トマム）、止若（トムワッカ・以上陸別町）、尾岱沼（オダイトウ・別海町）、貫気別（ヌキベツ）、芽生（メム・以上平取町）、賀張（ガバリ・門別町）、美利河（ピリカ・今金町）、鹹川（ウグイカワ・江差町）、力昼（リキビル・苫前町）、久遠（クドウ・大成町）などの難解な読みがある⁽⁴⁾。

第二の特徴は、札幌市、旭川市、帯広市などのように明治以降の計画的な市街地造りが先駆けたところでは、道路の区画が先行したために、条丁目が碁盤の目のように走り、きちっと区画化された美しい町並となっている。農村でも明治22年に雨竜華族組合農場として小作人が移住して形成された雨竜町では、国道と平行して基線が南北にまず敷設され、基線を起点としてその東に南北に東一号線、東二号線が敷かれ、同様にその西に、西一号線、西二号線が走っている。それに直交する形で一丁目、二丁目、

(4) 北海道新聞社「伝えたい大地に息づく文化遺産——シンポジウム『もっと、北海道の地名を考えるために』から」北海道新聞朝刊12・13面、1987年9月1日

三丁目というように道路が東西に延びている。このような地名命名の方法は、北海道においては極めて特色をなすものであり、他にも多くの事例がみられる。

第三の特徴は、移住当初からアイヌ地名を無視して、和人の出身地（母村）の県名や地名をそのまま開拓移住村の地名として附けていることである。これについては、その地域社会で生活する人々の母村との関わりが分かり、その生活文化の特徴がある程度予想できる。また母村の地名とは関わりなく、新しく考案された和名もある。

札幌郡広島町は、明治17年に広島県人25戸が移住して開基されたので、広島村となった。釧路市鳥取町は、明治17年から同18年にかけて鳥取県士族513人が移住することによって付けられた地名である。札幌市西区福井は、明治19年福井県から13戸が移住し付けられた地名である。石狩郡当別町金沢は、明治19年に松村市三郎が最初に移住し、その故郷の金沢にちなんで付けられた地名である。樺戸郡新十津川町は、明治22年に奈良県十津川村からの移住者によって開拓されたので、新十津川町という地名が付けられた。空知郡栗沢町の砺波は、明治26年に富山県西砺波郡広瀬村ほか11ヶ村（現在の福光町）から、105戸が団体移住することによって形成された村落であったため砺波という地名が付けられている。瀬棚郡北檜山町愛知は、明治26年愛知県人水野治左衛門など10戸、翌27年に27戸が入地したので、故郷にちなんで付けられた地名である。空知郡南幌町三重は、明治26・27年に三重県からの移民を中心として開墾され、地名も三重県にちなんで付けられた。

苫前郡羽幌町の平は、明治29年から30年にかけて、富山県東砺波郡平村から18戸が移住したことによって形成されたので、平という地名になった。常呂郡常呂町置戸町秋田は、明治44年に雄物川の洪水で土地を奪われた平鹿・雄勝の秋田県人64人が初めてこの地に移住したので付けられた地名である。常呂郡佐呂間町栃木は、栃木と群馬の県境を流れる渡良瀬川の明治44年の洪水をのがれ、66戸が移住したので付けられた地名である。紋別郡湧別町字福島は、大正5年に勇払原野10号線東6～10線に、

福島団体 13 戸が移住し付けられた地名である。雨竜郡雨竜町十八自治営農区は、母村の淡路島の洲本にちなんで洲本と命名されている。更に、まったく新しく考案された地名としては、雨竜郡雨竜町十六・十七自治営農区を豊里と呼んでいるが、実り豊かな土地になるようにという願いをこめて後に付けられた地名だという。標津郡中標津町協和は、開拓者が 3 つの出身県にまたがっていたので、共同精神に基づく地域振興を図ろうと、協和と名付けたといわれている。札幌市西区平和なども住民の平和を願って付けられた地名であるといえよう。

第四の特徴は、明治以降の開拓村落においては、移住当時の藩主や団体長などの個人の姓をそのまま地名にしているところもある。

伊達市は、明治 3 年に時の亘理藩主伊達邦成以下家臣 2,651 人の北海道移住によって築かれた。もともとアイヌ語のスムンペツ（西にある川）から紋鼈（もんぺつ）と命名されたが、明治 33 年伊達村と改称した。樺戸郡月形町は、明治 14 年に開設された樺戸集治監の初代典獄月形潔の姓に由来している。空知郡北村は、明治 15 年に入地した石川県人原田喜助が開拓の祖であるが、先駆者の北村雄治の姓にちなんで付けられている。瀬棚郡北檜山町丹羽は、明治 25 年福島県会津の人 12 戸・49 人が入地したが、開墾功労者丹羽五郎にちなんで付けられた地名である。札幌市西区手稲前田は、明治 27 年に旧加賀藩主前田利為創建による前田農場があったことによる。雨竜郡沼田町は、明治 27 年移住開拓した富山県人・沼田喜三郎の姓にちなんでつけられた地名である。

留萌市藤山町は、藤山要吉所有の農場に、富山・石川・福井の各県から 42 戸が移住し集落を形成したのでつけられた地名である。中川郡豊頃村二宮地区は、二宮尊徳の孫、尊親が明治 29 年に福島県相馬の農民をつれて移住したところである。虻田郡ニセコ町有島は、明治 30 年有島武（有島武郎の父）が有島農場を開設、70 戸が移住し付けられた地名である。旭川市永山は、明治 31 年屯田本部長・永山武四郎の姓にちなんで付けられた地名である。枝幸郡中頓別町藤井は、明治 41 年藤井清助兄弟が移住し臨時郵便集配人を兼ね枝幸村の目梨泊郵便局と往復したことにちなんで付けられた

地名，などにその事例を求めることができる。

第五の特徴は，屯田兵として移住してきたことにまつわって，屯田という地名を付けたところがある。

札幌市北区に屯田の地名が残っている。もともとは琴似町大字篠路村の一部であり，地名は明治 22 年当地に篠路屯田兵村が置かれたことにちなんでいる。北見市とん田町は，もともとは北見市の一部であり，明治 30 年から同 31 年に屯田兵入地後は第 2 中隊第 3 区に所属し，屯田兵の事績を記念して付けられた地名である。滝川市屯田町西は，もともと滝川市北竜の川の一部であり，地名は屯田兵村（第 5 大隊第 2 中隊）の練兵場であったことによって付けられた。

第六の特徴は，集落内の家の軒数や地形などの配置状況によって付けられた地名がある。

札幌市西区八軒（はちけん）は，越後から 40 軒の本願寺開拓農民が明治 4 年に山鼻に移住し，明治 8 年にその内の 8 軒が現在の西区八軒に再移住してその集落が形成された。札幌市西区二十四軒（にじゅうよんけん）も同様に本願寺移民が 24 戸移住したことによる。明治 24 年の移住を経て明治末期に戸数が 100 戸程に達したので，百戸町（ひゃっこまち・赤平市）などという地名が付けられた。

川の東に位置しているので川東（かわひがし・常呂川の東＝北見市，ソウベツ川の東＝洞爺村），川の西に位置するところから川西（かわにし・札内川および戸蔭川の西＝帯広市，天塩川の西＝美深町，湧別川の西＝湧別町，剣淵川の西＝和寒町），常呂川の南に移住がおこなわれたため川南（かわみなみ・置戸町），川の上流に位置しているので川上（かわかみ・雨竜町二十二区），川下に位置するところから川下（かわしも・厚別川下流域＝札幌市白石区，当別川下流沿岸＝当別町）という地名が付けられた。

川沿いに位置するところから川沿（かわぞえ・豊平川沿い＝札幌市南区，小糸魚川沿い＝苫小牧市），道の別れる三叉路の地点に位置しているので追分（おいわけ・雨竜町十五区）となった。石狩川と雨竜川が合流する地点に六戸家があったので六戸島（ろっこじま・雨竜町）という地名に

なった。

Ⅲ. 北海道の村落形成と地名

北海道における地名を以上のように分類すると、単純化されていて容易にその特徴が把握できそうにあるが、その把握は必ずしも容易ではない。しかし、移住に伴う人々の集合離散の形態が、地名の変遷とともに比較的生々しく把握できる可能性を秘めているところに特徴がある。北海道の地名研究の面白さは正にその点にある。つまり、その分類の重層構造の複合過程が、とりわけ、集落の形成が明治以降の比較的近年であったために、容易に捉えられるということである。

青森県以南の、わが国の伝統的社会では、かつては異なった民族や種族が隣住していたことが考えられる。長い歴史的過程に日本民族としての生活文化の混合・融合・変容の過程が進行し、比較的古い時代に固定している。今では、一つの集落に一つの神社があり、集落とその神社を中心とする氏子圏域が重なっているところに特徴がある。山や川を隔てた集落は、明治以降何度か繰り返された町村合併にもかかわらず、その圏域を破壊することなく、自然村を単位としてそれが連合する形で行政村が形成されている。本州の村々の生活文化が集落ごとに異なるといっているのもそこに原因の一つが考えられる。

一般的に云って、神社を中心とする氏子は集落内の家々を単位としているが、村社を中心とする行政村では、その集落が氏子の単位である。いわば旧村の連合体が行政村となっているのである。このようにわが国の伝統的社会では、集落の境界線が変わることなく個々の集落の生活文化を温存しながら、その特徴を維持してきた。

古くから開かれた道南地域社会の集落もおおよそ一集落一神社からなり、各集落を隔てる境界線にも殆ど変化を見ないのが特徴である。先に述べた福島町白符も白符川を中心とする海岸べりに開け、その東に浜町があり、沢一つ隔てて通称七軒町と呼ばれている慕舞（したまい）がある。白符川とその西の澗内川を挟む海岸べりの地域が澗内であり、その奥の別家

層によって新しく形成された集落を、白符の神明神社が存在するところからその名にちなんで、神明と命名し今日に至っている。

白符なる名称は、アイヌ語語のチロプ（鳥多き所）に由来し、転化して「しらふ」となったと説かれている。澗内もアイヌ語に語源があるように思われる。福島という地名は、津軽地方の市浦村、柏村、常盤村、平賀村や平内町などにみられる。七軒町とよばれている慕舞という地名は、津軽半島の十三湖の北にある小泊村の下前（古くは下舞とも表記されていた）と読みが共通し、両者の関係には興味深いものがある。地名においてもそうである。津軽海峡を取り巻く道南および対岸の津軽半島や下北半島は、集落の構造、家族・親族・同族などの族制、衣・食・住、通過儀礼、年中行事、口承文芸など、どの生活文化要素をとりあげても、ほとんど同じであるといっても過言ではないのである。このように津軽海峡文化圏域の生活文化は共通している。これは長い間の人々の交流の集積のなせることであり、歴史の深さを感じさせるのである。

これに対して、奥地の雨竜などのような明治以降に開けた開拓移住村においては、蜂須賀家の母村の徳島県から祭神を奉り、雨竜神社を建立し雨竜全域を氏子圏域として人々の心の結集を図るべく、春夏の例大祭をおこなっている。基線を中心とした線引きには変更はないが、自治営農区にあわせた一区、二区、三区……といったような区割りは絶えず流動し、これまで三区であった家はそれにとまって二区になったりで、地域結集のシンボルとしての集落を定める線はごく最近まで固定していなかったのである。しかも、明治30年に成立した50戸を単位とした区制は、大正4年部制に変わり、更にまた昭和2年区制に変わるという変動ぶりであった。しかし、住民はこのような行政区の目まぐるしい変動にもかかわらず、自分達の部落と呼ぶときは基線のXXさん、中道路のXXさんと言い表している。このように区割りの変動にもかかわらず、冠婚葬祭などの日常生活を通して人々を結集する地域統合体としての部落は存在するのである。

このような区割りの変化は、明治22年に蜂須賀家にまつわる徳島県人などの移住を多くみながら、それから他出していく過程で富山県人が多数

を占めていくという人口変動のなかでおこなわれた。その点、富山県西砺波郡一帯から集団移住してきて形成された栗沢町砺波部落とは、その傾向を異にしている。砺波部落の区画割りは移住当初と全く変わりなく、6つの実行組合単位に区画されている。母村の高瀬神社から奉遷した砺波神社を中心に、すべての住民の結集が計られ今日に至っている。このように村落へのかかわり合いは、雨竜町と砺波では異なっているが、住民レベルでの村落結集の流れの方向は、共通するものがある。

更に、人口の増加にともなう行政村レベルでの分村に基づく地名命名の特徴をみるならば、もともと雨竜村の一部をなしていた雨竜郡北竜町は、明治32年の分村に際して、その位置が雨竜村の北部を占めていたため、北竜村となり今日に至っている。このような事例は、砂川町・上砂川町や上中、南の富良野町などにみられる。

IV. 北海道の地名の変遷過程

北海道の地名は、おおよそ先に指摘したように先住者のアイヌ民族や、後から移住してきた和人が移住とともにもたらした母村や移住者の団体長などにまつわって付けられた地名によって特徴づけられる。それには、次に述べるようなさまざまな変遷過程がみられるが、アイヌ語読みから和名への変更はあっても、一旦和名化したものを、本来のアイヌ語に起源をもつ地名に戻した例はほとんどない。わずかに、マクカリプトゥが、狩太（かりぶと）と真狩（まっかり）に転用されたが、そのうちの狩太がニセコ（ニセコアンヌプリの頭部）と改名したことや、エンルムが漢字表記の襟裳を経て「えりも」に戻ったことのような若干の例外は認められる。

第一は、アイヌ語地名を、一旦は漢字の当て字で取りいれたが、後にそれが和名に変更になった地名がある。たとえば、苫前郡初山別村の茂築別（モチクベツ）は有明（ありあけ）に、有珠郡徳舜瞥（トクシュンベツ）村は大滝村に変更になった。この事例は他にもある。また、分村や合併などに際して、これまでのアイヌ語地名を、総ぐるみで和人好みの地名に改名した事例がある。たとえば、後志管内京極町は、はじめは倶知安（クッチャ

ン) 村から分村の際に、東倶知安村と名乗ったが、後に当地の開拓農場主京極男爵にちなんで京極と改称した。その折り字(あざ)名もそれまでのアイヌ語地名のメナが目名と漢字表記になったが、それが川西に、カシュプニが、東花と錦に、ペィペィナイが北岡と春日に改名された。そのほか甲斐、中岳、更進、大富、三崎など、いずれもアイヌ語地名とは関係なく命名されている。

第二は、アイヌ語読みを適当に漢字に当てはめ地名としたが、後にその漢字としての読みが一人歩きし、正式な地名となった事例がある。たとえば、もともとのアイヌ語のチキシサフに、月寒という漢字を宛てツキサップと読ませていたが、現在では漢字読みが優先し正式名称としてはツキサムと読ませている(札幌市)。同様な事例が下の表にみられる。このように便宜的につけられた地名以外に、鴻之舞(こうのまい)や霧多布(きりたっふ)のように、和語としてもそれなりの意味をもたせた地名もある。鴻之舞は、鴻(おおとり)が羽を広げた地形をなしているが、もともとは

アイヌ語地名	漢字表記	過去の読み	現在の読み	所在地
チキサプ	月 寒	ツキサップ	つきさむ	札幌市
アオシマイ	蒼 瑠	アオシマイ	そうまい	小清水町
ペルプネィ	歴 舟	ヘルフネ	れきふね	大樹町
チカブニ	近 文	チカブニ	ちかぶみ	旭川市
ポネウク	羽 帯	ポネオプ	はおび	清水町
チャシコチャ	安 骨	ヤスコツ	あんこつ	豊頃町
ピパイロ	美 生	ビハイロ	びせい	芽室町
パナウンクル	花 畔	バンナグロ	一部が花川 はなかわ ⁽⁵⁾	石狩町

(5) 石狩管内の花畔(バンナグロ)と樽川の地名にちなんで花川という団地の名称となった。

アイヌ語のクオマナィ（仕掛弓のある沢）からきている。霧多布は、海霧の発生が多いところであり、もともとはアイヌ語のキタブ（茅を刈ったところ）からきている。

第三は、アイヌ語読みを漢字に当てはめたが、後に漢字の一部が欠落し、その欠落した部分を無視して、全く新しい読みになった事例がある。

アイヌ語地名	当初の漢字表記	省略表記	現在の読み	所在地
オコンシペ	黄金蘂	黄金	こがね	伊達市
オタスネマフ	於尋麻布	麻布	あざぶ	羅臼町
オイカマナィ	生花苗	生花	せいか	大樹町
ペトウチ	辺富内	富内	とみうち	穂別町
カシュンナィ	花春内	花春	かしゅん	広尾町

第四の特徴は、北海道の市街地の宅地開発とともに、みどり・あけぼの・こぶし・北斗・さくら・あかしや・高台・南・などと、何処にでもありふれた地名が次々と付けられていることである。

V. む す び

以上の事例によって見てきたように、一つの社会集団に根ざした人々の営為の流れは共通であり、歴史過程における人々の生活文化の混合・融合・変容過程の長さが、その結合様式の態様にさまざまな変化をあたえているのである。ここで住民結合の形態を象徴する地名は、人々の生活文化の集積のなかで大きな意味を持ってくるのである。

北海道の地名を、このような視点から位置づけてみるならば、第一の特徴は、先住のアイヌ民族が呼び習わしていた地名を後から入ってきた和人が漢字を当てて記録したところにある。第二の特徴は、和人の母村における過去の生活体験や、移住開拓地における生活文化を形成していく過程で新たな生活経験をとうして地名が付けられ変容してきたということである。

この過程において明記しておかなければならないことは、先に指摘したように、北海道の地名が記録される初期の段階においてアイヌ語に基づいてつけられた地名が、和人の一方的意志によって変化してきているということである。その変化の流れは、アイヌ民族の人口が激減するなかで和人口が急激に膨張し、北海道全域を覆いつくしていることや、社会的・文化的に和人優位に北海道地域社会が展開している現実をみれば、当然の帰結なのかも知れない。アイヌ民族を中心に考えるならば、あまりにも悲しむべき現実であろう。そこには悲哀をかこつアイヌ民族の長い歴史が横たわっているのである。北海道に住むわれわれは、この現実を絶えず意識しこの現実を目を覆てはならないのである。

[付記] 本稿を執筆するにあたって、佐藤正明氏（希望ヶ丘育英文化財団）、伊藤裕満氏（アイヌ民族博物館）から多大な示唆を受けた。また大西崇君（北海道大学法学部学生）、丹羽章夫君（札幌大学経営学部学生）にも協力を得た。記して感謝の意を表したい。

参考文献（刊行年順）

- 山田秀三『東北と北海道アイヌ語地名考』楡書房、1957
宮良高弘『波照間島民俗誌』木耳社、1972
山田秀三「アイヌ語族の居住範囲」『山田秀三著作集』第1巻、草風館、1982
山田秀三『北海道の地名』北海道新聞社、1984
伊藤裕満「東北地方とアイヌへのアプローチ」『東北地方とアイヌ文化——第3回企画展——』アイヌ民族博物館、1986
宮良高弘「北海道生活文化文化研究の構想」京都大学人類学研究会『季刊人類学』第18巻1号、1987
北海道新聞社「伝えたい大地に息づく文化遺産——シンポジウム『もっと、北海道の地名を考えるために』から」北海道新聞朝刊12・13面、1987年9月1日
宮良高弘「北海道生活文化の周辺——アイヌ・和人・沖縄——」北海道文化財保護協会、1987
高倉新一郎・榎本守恵責任編集『北海道地名大辞典』（上）——地名編——・（下）——総説・地誌編・資料編——、角川書店、1987